

## 生田長江と生田春月のニイチェ(5)

### —— 日本におけるニイチェ受容史より ——

佐野晴夫

日本比較文学会の機関雑誌「比較文学」第27巻において、「生田長江と『ツァラトウストラ』テキスト——生田長江文庫のニイチェ文献を通じて」と題して、鳥取県日野郡日野町大字貝原257番地の生田長江文庫に保管されているニイチェ関係の文献リストを作製し、かつ「ツァラトウストラ」の翻訳に使用した原典および参照した英訳本について考究し、またナウマン書店刊(1906)のポケット版全集第7巻に黒と赤の鉛筆(またはペン)で記入されたアンダーラインの意義を問い、書き込まれたコメントの意図を考察した。しかも、あわせて、生涯3度にわたる「ツァラトウストラ」の訳文の同定と比較を企てることにより、改訳における諸問題を端的に、かつ具体的に観察した。今後、さらに、生田長江が遺した数十冊のノートの分析研究もあわせて続けるならば、彼のニイチェ受容の、いわば精神的訓読のあとを克明に追うことも可能となるであろうことを付記しておいた。

さて、「ツァラトウストラ」について、さらに問題点をあげるならば、少年時代に小牧師とあだ名で呼ばれたニイチェが、後年、神と人間世界との根本的な問いから、ついに「神は死んだ」と宣しながら、なぜツァラトウストラ像にゾロアスターを表象したのか。彼岸的なものを徹頭徹尾否定し、虚無思想のもとで、キリスト教のみならず、仏教も拒絶しながら、なぜツァラトウストラへ宗教的な衣をまとわせているのか。こうしたゆゆしき問題に対して、反キリスト者を自称するニイチェが以前にもまして、たとえ負の方向であれ、神との関わりを深化させたと解すべきだ、と説明されうるかもしれない。これだけでは、敬神の人々ばかりか、神の死に痛痒を感じない人々も、肯定しがたさを覚える。宗教を否定するニイチェの批判的な刃の鋭利さと力強さは異様であり、フォイエルバッハとは異質な程の非人間的要素をきらめかすだけに、かつてのプロテスタント的倫理観と別の次元で、この問題を思弁し、見誤らないようにしなければならない。

いま、ニイチェ著「ツァラトウストラ」の言語表現に限定した場合、ルター訳

聖書のドイツ語に倣い、プロテスタント的説教を思わす格調の高い文体は、文化的遺産への回帰とともに、文学的な直覚と靈感の初源性に接触することによって、具象的で節奏をもつ若々しい力を秘めた言語へと変貌している。手本となるべき言語遺産から宗教的内容を除去して、幼時より最も親しんできた言語様式をかりて、現代人の尖鋭で緊張した主観主義と激越で飽くことのない認識意欲を表白する。このとき、人間の世界の不安定で極端な現実世界を暴露して幻滅させながらも、そのリズム運動の中で幻想的なものや神話的なもののどまじき接近を予感さすのに役立つ。

ここで、わが国の「ツァラトゥストラ」の初期翻訳者たちの訳稿を吟味するとき、教典的な紛飾が何らかの形でほどこされていることに気付く。ニイチェの超宗教的な散文趣向を重んずるとき、登張信一郎訳註及評論「如是經 序品 光炎菩薩大師子吼經」(大10. 10, 星文館書店)では、篤信的な安芸門徒の家庭に育ったあかしとして、過度に經典に依拠する仏教用語を使用し、あまりにも独得な哲学世界を現出させた。これにくらべ、弘法大師の縁日に誕生したことに因んで、敬虔な家族から弘治と名付けられた生田長江は、「ツァラトゥストラ」の訳業を思いたった際、10年前に次兄貞二郎の感化のもとで、麴町区飯田町4丁目5番地のユニバーサリスト中央会堂で洗礼をうけて以来、クリスチャンでありつづけた時期で、ルッター訳聖書に文体を倣ったニイチェのように、彼も明治12年に完成された日本語訳「新約聖書」に拠った訳文をつづた。

- 1 汝大なる星よ。汝が照すところのものなきとき、何の幸福なることが汝にあらむ。  
十年の間、汝は此我が洞に來りき。我と、我が鷲と、また我が蛇とのなるに非ずば、汝は其道とに倦じたりしなるべし。  
されど我等は朝毎に汝を待ち、汝の犯濫を受けて汝を祝福せり。  
見よ。わが我自らの英知に倦じたるは、あまりに多くの密を集めたる蜜蜂のごとし。  
我はこれを得むとて差し伸べらるるところの手をもとむ。<sup>(116)</sup>
- 2,3 汝、大なる星よ。汝によりて照さるるところのものなくば、何の幸福なることか汝にあらむ。  
十年の間を、汝はこの我が洞にのほり來りき。我と、我が鷲と、また我が蛇とのあるにあらずば、汝は其光と其道とに倦じたりなるべし。  
されど我等は朝毎に汝を待ち、汝の横溢を受け、その事の故に汝を祝福せり。  
見よ。わが我自らの英知に倦じたるは、あまりに多くの密を集めたる蜜蜂のごとし。  
我はこれを得むとて差し伸べらるるところの手をもとむ。<sup>(117)</sup>

彼の3度の「ツァラトゥストラ」翻訳を比較するため、序説の冒頭の一部分を引用したものである。第1訳稿(1)と第2訳稿(2)との相違は顕著であるが、第3訳稿(3)は前の訳稿と全く同一で、個所によっては、わずかの修正が加わ

るのみである。すでに第1訳稿で、昨今の周密体も、定着しつつある言文一致体も使われていない。もっぱら簡潔で高雅なリズムの中に、蒼古にして荘重な情調をとじこめようと、雄勁な文語体を選択している。また他者からの強制も勧めもうけることなく、自主的に、大正10年3月頃から改訳を思いたち、初版の訳文よりも苦心を重ねて、同年10月22日頃終えたとき、幾多の誤訳と拙訳の訂正ばかりでなく、文体をある程度まで口語へ近づけた。けれども、基本的には、復古的な文語のリズムと措辞を失うことなく、依然として現代語になっていない。そして、その基調は、昭和10年4月刊行の「(新訳決定版)ニイチェ全集」7の「ツァラトゥストラ」の翻訳でも不変で、ニイチェの思考の軌跡と表現の意欲を十分に反映させ、自律性の芸術作品として価値を保持させようとして、原典の内容と形式に接近さす抹香臭い文語スタイルという至上命令に忠実であろうとしている。それ故に、その時、彼は「尚古的加特力的な原著者の様式<sup>(118)</sup>」を強調する。この場合、「ツァラトゥストラ」のスタイルが、「謂はば未来派的に限りなく自由であると共に、総ての尚古主義を超えて尚古的であり、最も厳密なる意味に於て加特力的である<sup>(119)</sup>」というのである。「尚古的加特力的」なるものは、「原著者」ではなく、作品の本質的「様式」に属するもので、その尚古主義は神学的意欲と直接に結びつかず、「原著者」の創造意欲と翻訳者の再現意欲に一種の宗教的熱情を感知させる。彼等の美意識は、先例に倣いながらも、なおかつ不羈の超時代的な表現を模索したすえ、たどり着いたものである。

生田長江と聖書との結びつきは、15歳に始まり、いらい、彼は明治初期からのプロテスタント諸派の邦語訳聖書を収集し、なじんでいる。だが、それだけにとどまらず、それらの聖書の訳出に寄せられた情熱に感動し、その手法を学んだあと、彼自らも依頼をうけて、末日聖徒イエスキリスト教会の聖典翻訳の難事業に従事した。このことは、「宗教的な履歴書一通」(原題「改宗の経緯」読売新聞、昭和5年8月19日-27日)の中でも言及されていないため、今日、彼の遺族をのぞいて、殆んど知られていない。伝導師と協力して訳稿を完成しながらも、彼自身ないし教団の事情があったのか、現在、「モルモン経」の表紙の扉には、「アルマ・オー・テイラー始めて日本語に翻訳 紀元千九百九年日本語訳始めて出版」と記され、生田長江の氏名は挙げられていない。しかしながら、同時期、彼の書生をしていた生田春月の日記をひもとくならば、師匠の言いつけで、四谷区霞岳町16番地(春月は正式な町名を識ることなく、日記では、初め代々木、次に千駄ヶ谷と誤りおぼえているが)の末日聖徒耶蘇基督教会まで翻訳原稿を届けたり、また千駄木林町193番地の長江宅を再三訪ねて、長時間、翻訳上の打ち合わせや討

議に熱中する宣教師テイラーの姿を描写している<sup>(120)</sup>。従来、全く指摘されたことのなかった事実であるが、テイラーに協力した「モルモン経」の完訳とそれに続く「ツァラトゥストラ」翻訳の企てには因果的必然性が察知できなくても、上記のごとく、聖書的な叙述スタイルという観点に立てば、緊密な内的関連性が存在し、またテイラー師の使命感にあふれる真摯な、訳業に傾注する姿勢は——目撃者の春月を辟易さす程度までに達したが——難事業にたちむかう勇気を長江に与えていたのである。

ふたたびニイチェの抒情詩にたちかえるならば、生田長江が訳詩を初めて発表したのは——春月より数年おくれて——大正7年5月から翌月にかけて雑誌「文章世界」に掲載した「『悦ばしき智識』の序曲——フリードリッヒ・ニイチェより」であり、これは、同年6月と7月の雑誌「帝国文学」に連載された「自由如鳥公子の歌」とともに、大正5年10月から昭和4年1月にかけて刊行されることになった新潮社版「ニイチェ全集」全10編の先駆的意義を帯びるものである。だが、その第9篇（大正15年11月刊）に収録され、荻原朔太郎や伊福部隆彦たちに多大の影響を与えた詩篇は、刊行された年の5月、「虚無思想」に「ニイチェの詩」、また翌月の同誌に「ディオニゾス・ディティラムベン」として掲載したものを再録したものであることをつけ加えておく必要がある。

いま、生田長江文庫に保存されているニイチェ関係文献のうち、訳詩に際して使用したテキストをさがすならば、“Friedrich Nietzsches Werke. Taschenausgabe. Bd. 6, C. G. Naumann Verlag in Leipzig 1906”が見つかる。それは、「放浪公子の歌」と「詩1871年—1888年」から構成されているが、長江訳の第9編では「詩1871年—1888年」の小題目に従って、「小曲」と「警句」に分けられ、「放浪公子の歌」をはずす代わりに、「ディオニゾス・ディティラムベン」が加えられている。ナウマン書店刊のポケット版第6巻に収められた「詩1871年—1888年」は50篇からなっているが、そのうち35篇しか彼は訳さず、「題辞」「ヴェニス」「寝巻を見たとき」「ローマの吐息」「生粋のドイツ人」「どのせむしもますます曲がる」「ハーフィスに」「スピノザに」「リヒャルト・ワーグナーに」「南国の音楽」「隠者は語る」「偽りの友人達に」「ヨリック君、元気を出せ」「すべての永遠に嘖き出る泉」「Der Halkyonter」の15篇がなぜか欠けている。

そこで、あらためて、長江の使用した底本を吟味するとき、「ナシ」という書き込みが、“Pia, caritatevole, amorossima”に一度書いたものを抹消したほかは、「理想に」「三つの断片」「ディオゲネスの樽より」「処世法」「自暴自棄」「寝巻を見たとき」「ローマの吐息」「隠者は語る」の8篇に加えられている。この書き

込みは、さきに見た新潮社版「ニイチェ全集」第9編、およびその訳詩をそっくり再録した日本評論社版「ニイチェ全集」第1巻（昭和11年6月刊）において欠けている未翻訳の作品とも、また新潮社の世界文学全集第37巻「近代詩人集」に収録した10篇の作品とも合致していない。恐らく、これらの「ナシ」の文字は、現在の生田長江文庫に所蔵されていないテキストとの比較の際に記入されたものと推定せざるをえない。

生田長江は、訳詩の数ほど、創作詩を後世に遺していない。人口に膾炙した詩篇は、せいぜい生田長江・赤松月船共著「新作詩入門」（昭3・5、大京堂書店）に採録された優美な小曲「ひやかかにみづをたたへて」「おもひでのふるきをたづね」「たちつくしものをおもへば」、気品たかく清澄な感傷を秘めた「弘前の玩具の山鳩」「白躑躅」「永久の悪夢」ぐらいであろう。だが、生田春月の編んだ「日本近代名詩集」（大8・3、越山堂）には、長江の作品として、3篇の小曲のほか、4行詩「哲学」が選ばれている。

#### 哲学

われは心より汝を愛す——その我のまた  
汝より愛せられむことをねがふは何故とや？  
愛する汝を更により深く愛し得むことの為めぞノ  
むくひを求めざる愛は愛ならじ<sup>(121)</sup>。

結句において完結する思惟は、愛の哲学と呼びうるものである。もし仮りに「汝」と呼びかけられるものを擬人化された「哲学」と置き換えるとき、「むくひを求めざる愛は愛ならじ」という功利的帰結の解釈空間は、長江の哲学への愛、とりわけニイチェ哲学へ寄す愛に新しい照明を与えてくれることは確かである。それはあくとして、この詩篇を春月がノートに書きうつしたのは、恐らく、超人社と称した本郷根津須賀町の借家で、長江夫妻や佐藤春夫と共同生活した時期や雑誌「反響」の編集の用務等で本郷森川町牛屋横丁に転居した長江宅へ往来した時期ではなく、最も師匠に心服し、文学研究に励んだ千駄木林町での書生時期と考えるのが、いちばん自然であるように思われる。

さて、春月が詩人として世に出るにあたり、最も恩顧をうけ、最も崇拜し、最も敬愛した生田長江に離反する 때가 やってくる。反逆性が春月の宿命であるとは言え、かつて恣意的に美化し、理想化した幻像に耽けていながら、実像と真相とを識ったと思い込んだ瞬間より、たちまち深く幻滅し、その反動として、個有の真価すら見失って、かつての愛を憎悪へかえ、蔑視するのを目撃する。このとき、常人は理解しがたい困惑を覚える。それが顕現化するの、彼が初めて執筆した長篇小説「相寄る魂」の中においてである。「ニイチェの祖述者として、気

の利いた評論家として、文壇に特殊の地位を占めている巖本閃光<sup>(122)</sup>」のモデルが生田長江であることは、一読すれば、自明のことである。春月ばかりでなく、佐藤春夫、奥栄一、高群逸枝、赤松月船、島田清次郎、藤沢清造、伊福部隆彦、橋爪健、犬田卯、住井すゑ子たちの才能を見出して文壇へ送った長江の功績も、小説では、青年文士たちに迎合し、文壇で君臨する茶番劇めく行為として描写され、それどころか、長江の自然主義的な私小説への批判等の文学的信条も揶揄され、人格も巧言令色の軽薄を文士として強調されている。このような悪意と蔑視が、どこから、いつ生まれたのであろうか。春月の長江から離反の直接の原因は、春月の側で積極的に発言せず、長江自らも沈黙したままで、いまなお完全には把握しがたい。

この点、「生田春月全集」第10巻附録の年表で関連するのは、大正3年10月の項目で、「植竹書院の依頼により、ドストエフスキの『罪と罰』の翻訳にかかる。二百枚前後執筆、余は他の訳なるも、無断にて生田春月一人の訳とされしため憤激、この世話を受けし先輩、生田長江氏の態度に不満をもつ。後日つひに交通を絶つる遠因となる<sup>(123)</sup>」という記述のみである。百田宗治は「路次ぐらし」（昭9、厚生閣）の中で、この翻訳書について、「生田氏訳の『罪と罰』はあの読みづらい六号ベタ組の訳文をいくたび繰返して読んだことか。たしかそれ以前には丸善から出た内田魯庵氏の部分訳きりなかったのではないか。新潮文庫で『罪と罰』の出たのもそれより後ではなかったかしら。兎に角一冊に纏ってゐて、装訂も変に目立たずガッチリとした本だったので外へ持って行ってよむに都合がよかった<sup>(124)</sup>」と回想しているが、すでに、「生田氏」という発言が限定された人物を指示せず、あいまいさを含んでいる。魯庵訳は明治25年11月に老鶴園から発刊されているが、中村白葉訳が大正3年10月に新潮社から発行されると、最初のロシア語からの直接訳とのことで、紙価を高めた。これに対して、生田長江・生田春月の共訳と称したドストエフスキ原作「罪と罰」（大正4年2月、植竹書院、のち三星社出版部）は、白葉訳に4ヵ月おくれて上梓したため、販売上の余波をうけた。それどころか、前半のみをドイツ語からの重訳で春月が担当し、後半を別人——春月と同様に「文章世界」への投稿で活躍した菱歌秦豊吉（明治25年—昭和31年）だと言われており、東京帝大法科を卒業し、三菱商社へ入社している時期にあたる——が英語本から訳したのにもかかわらず、共訳者がまだ無名であることから、春月単独訳として出版されようとした。このことを知った春月が抗議したことから、長江は雑誌「反響」の発刊に際して、書肆にさまざまな義理が生じていたため、販売上の要請をしりぞけることもできず、自らは筆を執らなかつ

たけれども、春月との共訳という体裁をとった。このような作者の詐称や代筆は、当時の出版界では、ありふれた現象で、例えば、新潮社の「思想・文芸講話叢書」全23冊のうち、長江の名前が冠している第1巻の中沢臨川との共編「近代思想十六講」(大4. 12)、第2巻の本間久雄との共編「最新社会問題十二講」(大8. 12)、第3巻の野上白川等4名編の「近代文芸十二講」(大10. 8)のいずれも、新潮社社員の加藤武雄が生活費捻出のために、名前だけを借りて執筆したのである。またパンフレット「日本近代文学館」第12号に掲載された白木茂の『『宝島』の翻訳』を読むと、「大正二年に押川浪氏が新潮社から刊行し、のちに新潮文庫におさめられた…」(昭48. 3, P.11)と記しているが、これは誤りで、実際は春月訳である。春月が翻訳に手を染めたばかりの時期、試みにドイツ語本より重訳し、そのステイヴンソン原作「宝島」前編・後編(大3. 5-7, 新潮社)を書肆の意向に従って、冒険小説の大家として声名の高い押川春浪の訳者名で発表したものである。このように代筆や代訳を容認する明治・大正期の文壇と出版界の実状を考慮するとき、作者研究や作品評価に際しては、それ相応の慎重さが必要とされる。

それをおくとしても、百田宗治から、「罪と罰」の「読みづらい六号ベタ組の訳文」といった指摘ばかりでなく、木村荘太あたりからは、さらに翻訳上の難点を辛辣に批判され、並外れて矜持の高い春月の心は傷つき、未見の共訳者の語学力不足を云々しながら、あわせて新人育成という美名にかくれた長江の不誠実さに激しく憤ったのである。

同郷の先輩である長江に崇敬の手紙を書きたとが契機となって、長江の家に身を寄せて文学の研究と創作の指導をうけている時期のことを、新潮社の訪問記者をしていた中村武羅夫(明19-昭24)は次のように描写している。「私が春月を初めて知ったのは、千駄木林町の長江の家であった。『素晴らしい天才青年で』という長江一流の最大級の言葉で紹介した。しかも、『きっと君たち二人は、肝胆相照らす友人になるに違いない。お互いに啓発し合って、一つ大いにやってもらいたいものだ』などと附加えて上乘の機嫌だった<sup>(125)</sup>」。長江のあまりにも調子のよい最高級の褒め言葉に、武羅夫が長江一流の誇張癖を感知したごとく、とかく才能の秘められた新人を身边に集め、甘言を弄しているように、そのうち、春月には思われるようになった。尊敬の念が大きかっただけに、千駄木林町時代や根津西須賀町時代でも、日常の生活に接して、裏面をかいま見たり、陰湿な部分に触れると、多感で極端な性格の春月は、それだけ深刻な幻滅感を覚えたのであろうか。同じ屋根の下に住む驕児佐藤春夫が、慶応義塾に席をおくだけで、奔

放な狂態を振舞いながらも、その才幹を愛でて、叱りもせず、甘やかす長江の姿勢に不満を抱いた。それに比べ、春月に対しては、新潮社の佐藤義亮の経営する日本文学学院の添削係へ推薦してくれてからは、文人として自立する手段を講じてくれそうになく、失望していた。それどころか、大正3年2月、「青鞥」同人の西崎花世（筆名長曾我部菊子）との結婚を即決したとき、その無謀さを諫められたことがあり、森田草平から長江へ「反響」の発行責任が移って以降、春月が事実上の編集人および記者を担当しながらも、物心ともに長江から報いらなかったりしたことを含めて、大小の悲憤がつみ重なったそのあげく、「罪と罰」の翻訳問題において、遂に春月の憤懣が爆発したのであろう。

丁度、それは長江が森川町1番地牛屋横町178号へ移り住んでいた時期で、春月に対する彼の苛立ちについて、両者共通の友人である武羅夫は、「長江も…本郷森川町に短い期間借家して移転したことがあって、これはその時分に訪ねた私に、長江が直接話したことであるが、春月のことを確かに利己主義だとか、卑屈な性格、君子の齢いすることの出来ない人物であるというようなことを言っていた<sup>(126)</sup>」と証言し、かつ、かつて「天才青年」と称揚した同一人物の口から、問題の悪口を聞くことの矛盾を武羅夫は指摘する。武羅夫自身は、師弟間の対立と葛藤の最大の原因を、長江が秘そかに病んでいたハンセン氏病に見出している。ある日、酒席で、春月が神経質に絶望的な顔付きで、長江のたくらみで、業病を感染させられ、潜伏期が終って病気の徴候が現われる10年後には自殺するばかりだと口走っていた情景を回顧している。「長江が陰険で、意地が悪い一面があるというのは、春月に言わせると、つまり斯ういうことである。それは、自分で自分の病気の性質をハッキリ知り、感染することなども十分知っておきながら、長江はそれをわざわざ人に感染させようとするというのである。たとえば、自家の風呂にいっしょに入らせて、背中を流させるとか、自分の唇に触れた盃とか、コップなどを、人に差すとか、一つ家庭にいと、自分の食い余したものを、食べ食べえと言って無理に強いるというのである<sup>(127)</sup>」。知覚異常をとまなう斑紋、結節、神経肥厚、筋肉萎縮の初期症状を自覚した長江が医師から診断されたのは、一高在学中のことである。親友の森田草平でさえ、それを識ったのは、大学を卒業して数年経てからであり、明治44年6月に根津西須賀町2番地の邸宅に春月が長江夫妻や佐藤春夫とともに借りて住み始めたとき、その知識がなかったはずであるから、数ヵ月後、王子の醸造試験所へ研修に来ていた従兄太田史郎と同居を理由にして去った時ではなからうか。また翌年春には王子滝野川から牛込横寺町へ転居してから、武羅夫と親密な交際が始まっており、辻褄が合う。



だが、「自分で自分の病気の性質をハッキリ知り、感染することも十分知っておりながら、長江はそれをわざわざ人に感染させるようとする」という主張は、一見、長江の真意を理解しない発言である。明治7年にノルウェー人アールマウエル・ハンセンによって発見されたライ菌に対して、この時代、ようやく光田健輔たち医師の研究熱が高まり、また明治30年の第1回国際癩学会の決議にもられた最良の予防法として病気の蔓延をふせぐ隔離法に基づく癩予防法が、明治40年3月19日官報第7113号の「法律第11号」として公布されたばかりである。戸数が9,164,273、人口が47,161,403であった明治39年4月、第2回癩調査によると、患者戸数22,887（戸数千分比2.50）、患者人口102,585（人口千分比2.18）、患者数男16,607女7,208計23,815（人口毎千患者数0.50）、住所不定患者数1,182であった時代である<sup>(128)</sup>。レプラに罹った浮浪者や貧民で自宅隔離が不完全な者は癩病院へ呑応なしに救助隔離されることになったが、富者は任意とされたので、長江は在宅治療に励む道を選んだ。だが、それは時代を先導する自らの使命を意識し、自らの生命の燃焼を近代日本の文化と思想の発展のために尽したいという悲願からの選択であった。長江にとり、病気とは何だったろうか。人間性の基盤の問題に関して言えば、病気は虚弱と衰退の肉体へたちかえすことにより、特に「なりんぼ」「かったい」「くされ」とか、差別的蔑称で呼ばれていた癩病は、その皮膚等の障害による外形上の欠損によって、人間性の尊厳を著しく傷つける。だが、ニイチェが、人間は「病む動物だ」と主張した意味において、また発病を契機として、肉体が自然からの離脱であり、本然からの背馳であることから、逆に精神の高揚、魂の深化をもたらし、人間的基盤の強化に力をあたえることも可能である。また、病者になることにより、初めて、健康者以上に、高次の健康な生の意義を発見できる。そこで彼は世界から遊離した賢者や自虐的に生を呪うニヒリストになることを拒絶し、彼は苦行僧とも異なる求道的な実践的生活を俗人のままで送ることを意欲したのである。

それが転機となり、中世の尼僧が癩者の膿を吸いとるまでの盲目的愛を内包するキリスト教から、幼児期より親和を覚えていた仏教へと回帰して行く。彼は、理想世界の実現を盲信さず空想的社会主義思想の瞞着を求めないように、宗教の中に、方便としての慈悲を念願しない。彼は中道と不放逸の日常を志向する。中道は中途半端の観念ではない。不放逸でも有害無益におわる苦行とは別種のもので、正しく生活しながら思索する八正道において、仏教の根本精神を見出した。この点、長江の近くにいながら、思想的に距離をとりつづけた平塚らいてうが求める禪定とか、見性といったものを、長江はしりぞける。そして正道を思弁し、

実践に移す自他の努力の中に、真の解脱があり、極楽も浄土も存在すると考える。また芸術世界においても、大正10年頃から、創作「釈尊」(昭10. 1, 香風閣)の考想をもち、一方で、パーリ語原典による仏典を読み、とりわけ、律藏研究のため、チルダースを苦心して読解しようとし、他方で、オルデンベルク、リス・デヴィヅ以降の文化や思想史を、またカンニンハム以来の地誌紀行を研索しながら、執筆にかかった。それは、ある面で、ニイチェ研究の継続の延長線にあるとも言えるが、それは文学を通じての求善提的精進を呼びうるものである。ニイチェ翻訳のときにもまして、芸術的なもの、学術的なもの、道徳的なものが、ひとつの思想に合一し、さらにそのものが、永遠の生命を求めてやまない宗教的解脱へとかぎりなく接近して行くのを確信した。

しかし、だが、平塚らいてうが長江について、「先生は決して、自分の不幸な病気については、最後まで語られませんでした。むしろ、いつも平気をよそおって、お顔の皮膚にその徴候がはっきり現われてからも会合に出席し、演壇にも立ち、人の迷惑など気付かぬように遠慮なくふるまっていました<sup>(129)</sup>」と報告しているごとく、長江は、憐憫の情や排斥の声におびえる弱者として生きるのではなく、怯むことなく、毅然と、超人のように、生の意欲をもって生きぬこうとした。ただし、彼は、常人として持つべき衛生観念と他者を思いやる倫理性に欠けていることには目をつぶってしまった。ここにおいて、長江が陰険に自分の病気を多くの他の人間に感染させようと企んでいると主張する春月の見解は、にわかには正当性を帯びてくる。それどころか、春月と類似する、あるいはそれをこえる嫌悪と憎悪の感情をこめて発言するものがある。例えば、神経肥厚が尺骨神経、腓骨神経などにおいて索状、紡錘状、結節状にあらわれ、圧痛を訴えるようになった病歴期の長江に対して、らいてうは「わたしは先生に深く同情しながらも、時には悪魔的な心境ではないかとさえ思ったほどでした<sup>(130)</sup>」と、自伝の中で告白している。「わたくしが奥村といっしょになり、長女の曙生あけみが生まれて、2つ3つになったころでしたから、大正5、6年ですか、一度訪ねてくださったことがありました。曙生の髪の毛が濃い、黒い毛だと、しきりに頭をなでたりされるので、こちらはずいぶんビクビクしたものでした。ゆっくりしていられるので天ぷらそばかなにかおすすめすると、お盆にのせて畳の上に置いたのですが、『リューマチで手が不自由だから、なにか台がほしい』といわれるので、机の上に置きかえると、そのままごちなく箸を使いながら、リョーマチで困まると繰返されるのでした。生田先生がお帰りになったあと、大あわてで家のなかを消毒しましたが、なんとも悲しいような、やりきれないような気持でした<sup>(131)</sup>」。さらに、昭

和4年夏より執筆をはじめた「釈尊伝」の「幼年時代」にあたる2百枚以上近い原稿用紙が小包便で長江から新潮社へ送付されて来たとき、中村武羅夫は小包に手を触れず、榎崎勤がその取扱いを依頼された。その時の悲惨で滑稽な光景を榎崎勤は「作家の舞台裏」で再現している。「そのころ、わたくしは異常な潔癖で、常に洋服のポケットに脱脂綿を酒精にたっぷり浸した脱脂綿入れをしのばせていた。わたくしは庶務に頼み、リゾール液とスプレーを買ってもらうと、長江の小包をさげて、屋上へあがっていった。小包の紐をとくと、青い卦の原稿用紙に『小公子生田長江』と書かれた部厚い原稿が出てきた。わたくしは、濃いリゾールを薄めた液をいれたスプレーのゴム袋をおしては、原稿用紙一枚、一枚、その裏表に、液をふりかけて消毒したが、ときおり風に吹きあおられて、なかなか捗らない。それどころか黄味がかかったしみがついているのもある。どうにも気味がわるい。しばらくスプレーを放り出して、溜息を吐いた。すると、乾かしてある原稿用紙が風に吹き飛ばされそうになる。あわてて押さえる。神経はくたくたに疲れてしまい、4、50枚消毒しただけで、片付けはじめた。屋上の風は冷めたい。西の後方はるか、家並みのはての、雪をかぶっている富士山を眺めて、編集者という職業の因果なことをおもうのであった<sup>(132)</sup>」。そのあと、彼は赤インクで活字指定を書き入れて印刷所へ渡したところ、消毒液の強烈な臭気の染み込んだ原稿に不審を抱き、その理由がわかると、植字工は仕事を拒否し、結局、「小公子」は「新潮」に掲載されず、昭和5年7月の「改造」——榎崎勤は「中央公論」と記憶違いしている<sup>(133)</sup>——に載った。他者に迷惑をかけることを不徳義として長江に嫌悪感を強烈に持った榎崎勤も、のちには「小公子」を拒否した行為を悔いた。彼の示した極端な行動は、正しい医学知識とはかかわりなく、当時とすれば、ありふれた行為で、中には癩者の触れた湯飲み茶碗をそのまま芥箱へ捨てるという描写に出会うこともある。

ふたたび、春月に話をもとせば、遺伝と宿業とに結びついた天刑病という呼称が科学性をもたない俗信であるのにくらべ、癩桿菌の感染が皮膚の外傷や唾液を通じて口腔内や鼻粘膜において起るといふ病理学的知識より、共同生活をしてきた時期、長江から故意に病気を感染させられてしまったという春月の思いは、強迫観念となって、根づいていたという。その間の事情を知る中村武羅夫は、春月の変死を聞くと同時に、まず「十年したら死んでしまう。それまでも、若し、病気が現われたら、すぐ死んでしまう」の言葉が閃めいたという<sup>(134)</sup>。元来、病気に対する春月のおびえは尋常ではない。かって千駄木林時代に痰にわずかばかり血がまじったとき、結核に対する恐怖から、療養のための帰郷を決心をさせた

ほどである。このことを考慮するとき、大正6年6月に肺結核で病死した長江のふしを夫人の問題とともに、春月の後半生を悩ませ続けたという病的な強迫観念を深層心理学の立場から解明して行くとき、彼の自殺理由に新しい事実と解釈が生ずるかもしれない。

春月の詩才について厳しい評価しか下していなかった長江も、かつての門下生の死後に出版された詩集「象徴の鳥賊」(昭5. 6, 第一書房)を通読したあと、ほめていたと、昭和58年秋、生田長江文庫で面談した際、甥で、しかも娘婿にあたる生田幸喜は記憶していた。その折、慶応義塾大学医学部予科学生の時、師弟間の不仲となった直接の原因について聞いたことがないかと質問したが、少年期より叔父とともにすごした生田幸喜は、学業より音楽へ傾倒した時期であるけれども、長江自らの口から春月の話を聞いたことはないと言っていた。他方、春月も、小説「相寄る魂」で、師匠へ芸術的手段で攻撃を加えたけれども、名指しで「春月・コントラ・長江」の著述を避けた。そして長江からの離別を経済学、心理学、病理学といったいわゆる形而下の問題にとどまらせないで、ニイチェとワグネルとの離反と同一視して、形而上の問題へとおきかえようとする意図を、次の文で読みとることが出来る。「私達はあまりに屢々、古い友達と別れなければならない運命に置かれる。然らば、汝の『別れの時』をして、意義あらしめよ……ニイチェのワグネルに於けるがやうに、その離反が年少者の成長の結果であるとき。最上の影響から離脱が、年少者の自立が、友情の冷却の原因であるとき。かかる場合こそ、実に止むを得ない、運命的なものである。それだけの重大な理由なくして、一旦の怒りや気まぐれからして、友を棄て去るのは、愚かな行為である<sup>(135)</sup>」。この「静かなる友達」で語る春月の脳裏には、文学上の恩師との義絶が想起されながら、2人のドイツの天才達の不幸な別れが自己弁明に好都合な例証として二重映しされる。「ニイチェは高貴な性格であった。然し、かうした人であったと云える。彼のワグネルからの離反の如き、思想的乖離のためと云へ、その顕著な例である。その点だけでは、自分もニイチェに似ているのかも知れない<sup>(136)</sup>」。ともすると、はにかみと寡黙さから女性的な性格とみなされがちな春月は、温和な人道主義や社会主義、キリスト教や仏教をはじめとする数多くの主義や思想からの陣営からの背教者、脱柵者、逃亡者であり、何にもまして、誠実であるべき友人や忠実を励むべき先輩から離反者、裏切者であったことを顧て、自らを極端人と呼んで憚らぬ。

春月は、人間の内部に荒魂と和魂とを想定する。荒魂は、進んで戦いを唱え、征服しようとして、そこに激越な意欲と愛憎がうまれる、和魂は、内へ退いて、

自己の狭い世界を守り、調和を求めて、他者と共存に生きようとする、と考えられる。だが、統一的調和は、極端人には、初めより許されていない。春月の和魂は、いかなる戦いにも堪えられない。他者の自我に侵害することはもとより、自らの運命にすら反抗することが出来ず、諦念に安んじようとする。すると、行為と最も程遠かった思念が自己に反逆し、反対運動を最もライディカルにひき起す。そこで自らの性情を制御しがたくなりはじめた大正14年1月にニイチェの場合を語る。「ニイチェはその優しい性情にもかかわらず荒魂であった。荒魂はひとりと他と戦ふのみならず、また自己とも戦ふ。即ち自己叛逆である。そして人間の自己叛逆は超人の理想である<sup>(137)</sup>」。反抗の焰となった叛逆心は、安易な妥協を排し、世俗の美德をしりぞけるパッションのエネルギーを保有する。心理学者となった春月は、人間的性格の強弱について、ニイチェを通じて、再度、考察する。「弱いものは、弱さ故に、強さにあこがれる。そこに自己嫌悪が生れ、自己叛逆が行はれる。ニイチェが現れてから、独逸に於いて、いかに多くの超人の謳歌者が現れたかを、独逸文学に親しんでゐる人は、よく知ってゐる筈である。否それよりも、私達はあの勇しいザラツストラ・ニイチェその人の述作の中に、その激しい自己叛逆の叫びを聞くやうに思ふ。ニイチェの哲学を、その超人説を、強者の道德説を、彼のあまりに弱い性格に対する反抗と見る俗説を駁して、ニイチェの決して弱い性格の人でなかった事を、曾って阿部次郎氏が説かれたことがある。あの甚大の孤独に堪へたニイチェを単純に弱いといふ言葉で評し去る事は、もとより許されない事であらう。然し、ニイチェが優しい、傷つきやすい魂であった事、彼が自己叛逆性の人であった事は、私達の認めざるを得ないところである<sup>(138)</sup>」。春月が「自己叛逆性」と呼ぶ分裂的で、多面的な気質からの抑圧された欲求と自制しがたく生起する生の衝動と急激な転換は、過剰の涙の感傷性と純粹の理想主義のあとに、現実の甚大な失意と絶望の世界苦へ墮とし入れた。

長江の庇護を離れた詩人は、自立を余儀なくされ、あるときはニイチェの権力意志説へ傾倒して果さず、あるときは「片隅の幸福」を唱えて徹しきれず、あるときは東洋流の超脱を希求して叶えられず、またあるときは人道的な社会主義のおたけびが、政治的間奏曲の中でアナーキズムの悲鳴へと化して行った。豊かな情感をともなった魂の営為は、いまや、涙の枯渇した沈痛な懷疑主義と虚無的な悲劇主義の支配下におかれ、切実な生命感情の表現は、肯定と否定の明白な叫喚であるアフオリズとなった。

「生田春月全集」をひもとくとき、第7巻（感想集1）に収録された「片隅の幸福」にふくまれる「砕かれた魂」「紙上漫步」、次に「知恵に輝く愛」にふくま

れる「愛についての断想」「サイレンの誘ひ——有島武郎氏の紀念のため——」そして翻訳された「エーワルトの言葉」「ノヴァリスの言葉」「女性と恋愛と結婚と」、第8巻(感想集2)に収められた「旅行く一人」中の「静かなる友達」「心は芭蕉」「純真といふこと」「生に処する道」、第9巻(感想・書簡)では、「阿呆理詰(Aphorismen)」と宛字したものに「場末の支那料理店の炒雑碎<sup>チヤブスイ</sup>」の副題を与えた1章、次に「感想雑篇」中の「惨敗記」「孤独の北極から」「無為を求めて」「逆説的時代?」にふくまれる部分、そして第10巻(評論集)の「山家文学論集」にふくまれる「批評家読本」「反語・逆説・諧謔・背理等の数頁」、さらに「人生詩論集」にふくまれる「詩への尖端語<sup>アフォリズム</sup>」「靈魂の線(詩への尖端語第二)」「詩学的小児病其他」が、いずれもアフォリズムで構成されている。大正12年から昭和5年にかけて、未だ日本では認知されていない文学ジャンルの特殊形式を使用して発表したこれらの作品は、主としてニイチェ、次いで彼を通じて知ったノヴァリス、エーワルト、リヒテンベルク、シャンフォールたちに学んだ所産である。しかし、わが国では、至高の理想主義を最低の実現度との落差が、鮮烈な皮肉、すべての価値を逆転さすパロディ、底意を秘めて暴露するトラヴェステイ等の薬味で知的にして簡潔に世界を統括する思想の表現原理の受容土壌は未開墾のまま、反響がとぼしかった。このような文学土壌に、大正11年4月、初めて萩原朔太郎が「新しき欲情」という種子を播いたとき、「以前からこの形式で書いて見たいと思った事もあったが、自分の柄にもない事と思ったので、全く断念してしまった<sup>(139)</sup>」春月は、早速、「詩と音楽」第2巻第1号附録のアルス出版月報に書評を書いた。その中で、アフォリズムという術語を使用せず、「情調哲学」と称した萩原朔太郎の「直観から来た断片章句<sup>(140)</sup>」の本質を解明し、体系の著述と全く異なる読み方の楽しみを伝え、またニイチェとの同質部分を指摘し、かつ共感しうる所と反撥する所のあることを誠実に表明した。他方、アポロ的なものとディオニソス的なものというニイチェの理論に触発されて、大正7年から「詩の原理」の執筆をはじめ、詩作をしていた萩原朔太郎は、これまでの室生犀星や北原白秋とは異質な学匠タイプで、しかも等質の虚無的な力学を内蔵する詩人生田春月と邂逅し、かたい友情を結ぶことになった。

痛々しく苦渋にみちた生の欲求は満たされず、その代償行為としてのアフォリズム形式を借りた世界苦の克服も実現されず、春月の詩傾向は、ますます病的でなげやりなデカダンのものへ変じ、受難のいきどおりを冷却化した自虐的な言葉は、自らの生命を破壊しかねないほどのニヒリズムを孕むようになった。そして、遂に、昭和5年5月中旬、新潮社「世界文学全集」のためのズウデルマン「猫

橋」の翻訳を終えたあと、トランクにただ1冊の原書 Stepan Zweig : Der Kampf mit dem Dämon — Hölderlin, Kleist, Nietzsche をつめて自殺旅行へと発った。

ところで、文壇で、芥川竜之介と並んで、愛蔵書家として名高い彼の死後には、数千冊の書籍がのこされた。瀬戸内海で遺体が発見できないまま、5月25日牛込の多聞院で、写真を飾り、告別式が挙行されることになり、その前夜、牛込弁天町44番地の家で通夜が営まれていた。そこへ「相寄る魂」のモデル問題で積年絶交し、近日仲直りする予定だった佐藤春夫も弔問に訪ね、2階にあがった際、独英仏ばかりでなく伊希の洋書群が並んだ壮観さに眼をうばわれた。そして次々とそれらをぬき出してみると、赤鉛筆で下線を引きながら読書をする春月の癖から、いずれの原書も通読した跡が残されるのに驚嘆し、かって長江のもとで兄弟子であった春月の勉学の精進ぶりと博覧強記について、居合わせた加藤武夫、中村武羅夫、長谷川時雨、福士幸次郎たちから聞き、信じがたい顔であったという。それらの蔵書も他の遺産とともに二分され、一半は入籍されることなく内妻におわった花世のもとへ、他の一半は生田家へひきとられることになった。

生田花世のもとにおかれた和書や洋書のうち、形見わけとして、数冊ずつ、春月に師事し、交際のあった全国の若き詩人へ贈られた。そして、彼女が軍部へ文化活動に協力した関係であろうか、昭和14年、たまたま中国から帰還兵として帰国して来た愛弟子の加藤愛夫に死蔵しているドイツ書について相談し、輸入も少なくなったことなので、ドイツ文学研究者のため、日独親善のため寄贈することにした。その時のことを、戦後、北海道詩人協会会長となった加藤愛夫は、同人雑誌「共悦」No.201の随想「生田花世思い出雑誌(1)」の中で語っている。「そこで私は夫人と二人で……ドイツ大使館へ出かけた。春月愛蔵のレクラム本200冊を寄贈したいから日独文化のために役だててほしいと話をもっていった。するとそうしたことは、日独文化協会があるから、そこで相談してほしいということであった。協会のドーナト氏を紹介してくれた。夫人と私はすぐ協会へ行ったが、その人は留守であって、姜氏という人に会った。大変飲んでくれて、後日文書で御返事するからということで、暫く話し合っただけで私たちは協会を辞した<sup>(141)</sup>」。レクラムの文庫本とは言え、貧乏書生だった20歳のときから、20年間、古本屋や川西屋と丸善で買い集め、その中にまじるビョルンソン、シャトウブリアン、ツルゲーネフ、ゴオリキー等を重訳することで、糊口をしのぐことが出来、本邦で初めてゲーテ詩集やハイネの全抒情詩を紹介しえたり、春月にノヴァリス、メーリケ、ウーラント、アイヘンドルフ等のドイツ浪漫主義に開眼させたり、ニイチェの詩と思想にも触れさせてくれた貴重な媒体であった。生田博孝のもとに

おかれたレクラム叢書を加えて、ほぼ400冊と考えれば、ドイツ文学愛好者の間で、レクラム本を最も多数所蔵しているのはケーベル博士で、次が春月だと噂されたのも、まんざら誤りではないように思われる。

ところで初代日独協会は明治44年10月に設立されたが、貴顕の社交団体にとどまっていたことから、文化交流を目的として、大正14年にベルリンに Japan Institute が、日本でも、昭和2年に日独文化協会（Das Japanisch-Deutsche Kultur Institut e. V.）が設立された。春月のドイツ書が寄贈された昭和14年当時、その事務所は、日独協会と同じ日比谷公園市政会館4階にあり、男爵三井高陽（麴町区三番町4）の私邸の一角に移転したのは昭和17年のことである。だが、その会館は戦災で焼失したものの、書籍の残存もあったらしいが、持ち去られたまま、戦後、新しい協会へは引き継がれていないそうである<sup>(142)</sup>。

春月の蔵書印の押された書籍に関して、昭和5年5月には研究を目的とする春月会が発足し、その事業のひとつとして、蔵書のリスト作製が計画されていたようであるが、会員の主要メンバーに照合したものの、蔵書目録の実現を記憶している人は誰もいなかった。また花世の保管していた蔵書について、彼女に好意を抱かなかった人の中には、云々する者もいるが、彼女は東京で2度戦災に遭遇し、書籍も家財もことごとく灰燼に帰している。その後、彼女が世話をうけ、また詩歌の指導をした矢野克子（政治家徳田球一の実妹）とその仲間、花世の死後、「生田花世詩歌全集」（昭46. 10, 木犀書房）を編纂するとともに、彼女の蔵書を数次にわたり、昭和女子大学近代文庫に贈った。昭和56年11月、同文庫の受贈帳簿を調査すると、単行本と雑誌を合せて1,270冊余り、それに肉筆原稿や写真が見つかる。しかし、いずれも戦後刊行されたもので、春月の作物は、ツルゲエネフ原作「初恋」（新潮文庫）と「靈魂の秋」（甲陽書房文庫）の2冊にすぎない。勿論、ニイチェ関係の凶書が、かって花世の手許にあったと推測されるけれども、今となっては、確認する方法がない。

これに対して、春月の実弟生田博孝が保管することになった洋書の相当部分は、今日、判明している。と言うのは、春月の晩年の若き詩友で、のちに哲学者となった松尾啓吉が、洋書の主要なものの大部分を記録し、それを、昭和59年に転宅した際、見つけたとのことで、昭和60年2月初旬面談したとき、筆者はかいま見て、後日、その写しの恵贈をうけた。そこには、「この文庫が作製された時期は1930年、春月の死の年の秋だがその月を詳にしない。場所は確かで、当時麻布の郵便局勤務で麻布十番に住まわれていた春月実弟の故生田博孝氏宅で、その居間に春月のドイツ語蔵書は1時保管されており、書目の筆写のため、私は3-4日、夜間



に通ったことがある」という一文が、日付けと署名と印とを添えて、書かれている。横罫線のノート28頁に279冊の洋書文献目録が記載されている。そして最後の頁には、松尾啓吉に対して、旅立ちの前に贈った9冊の書名も付記されている。ノートに筆記した書目は、保管されていた全書籍の70%程度にすぎず、とりわけレクラム文庫のすべてを省いたという。花世と二分された書籍数、松尾啓吉によって書きとめられた冊数と書きのぞかれた冊数、彼と春月が書齋で撮影された写真にうった冊数、知人と門人に贈られた冊数といったものを勘案すると、恐らく、洋書だけで千冊は下らない。ところで、当時、松尾啓吉はドイツ語の最初の学級を終えたばかりの知識で、書名と著者とを原語で綴り、依頼の要請に従って、それらの日本語訳も添える作業がひかえているので、いきおい、図書の刊行年と出版地を記すのを省略したという。文献コピーの添書によると、氏は不完備があれば、補完と修正を許す旨を述べておられるので、括弧内に、わかる範囲で補いながら、目録を作製してみよう。

## 生田博孝保管の春月所蔵ニイチェ文献目録

- Nietzsches Werke. 1 - 8 , und Ergänzungsband. Taschenausgabe. (Naumann Verlag in Leipzig 1906.)  
Friedrich Nietzsches Werke. Bd. 2 und 8.  
Karl Strecken : Nietzsche und Strindberg. (München 1921)  
K. J. Obenauer : Friedrich Nietzsche, (der ekstatische Nihilist. Eine Studie zur Krise des religiösen Bewußtseins. Jena 1924.)  
(Johann) Kräutlein : Nietzsches Morallehre (in ihrem begrifflichen Aufbau. Eine systematische Studie. Leipzig 1926)  
A. Werner : Die Philosophie Friedrich Nietzsches. (München 1923)  
Robert Saitschick : Deutsche Skeptiker... Lichtenberg, Nietzsche. (Zur Psychologie des neueren Individualismus, Berlin 1906)  
Gedichte und Sprüche von Friedrich Nietzsche. (Großoktav-Ausgabe. Bd. XVI. Leipzig 1919)  
Georg Simmel : Schopenhauer und Nietzsche. (Leipzig 1908)  
Heinrich Römer : Nietzsche.. I u. II (Leipzig 1921)  
Leo Schestow : Tolstoi und Nietzsche. (russ. 1900 ; dt. 1924)  
Leo Schestow : Dostojewski und Nietzsche. (russ. 1902 ; dt. 1924)  
Stepnan Zweig : Der Kampf mit dem Dämon. Hölerlin, Kleist, Nietzsche. (Leipzig 1925)  
Alois Riehl : Friedrich Nietzsche. (Der Künstler und der Denker. Stuttgart 1897)  
Ernst Bertram : Nietzsche. Versuch einer Mythologie. (Berlin 1918)  
Lou Andreas-Salomé : Friedrich Nietzsche in seinen Werken. (Dresden 1894)  
Ernest Seilliére : Apollo oder Dionysos?

これら27冊の書籍がどこに現存するか、それとも現存しないのか、不明である。生田博孝が大陸で官吏となった昭和18年頃、新興の満州国中央図書館へ、春月の蔵書を寄贈したということであるが、春月山房等の蔵書印のついたまま、今なお残っている可能性もある。

昭和の初期、初めて思想詩人としての春月を訪ねた頃のことを回顧して、松尾啓吉は、1回目の訪問は急ぎの原稿書きあがるために面会ができず、数日後の訪問では、主としてニイチェ詩について語り合い、それ以降も、ウナムーノの悲劇的運命について、ヴォリンガーの根源的生産について、さらにはベルトラム著「ニイチェ」、とくにニイチェとワーグナーとの離別等が話題になったこと、さらに春月の所持していたニイチェ全集は青味がかった表紙のポケット版だったこと等を語る。松尾啓吉は思想的に彼に最も近く、信頼が厚かったのか、旅行の前日、正午頃、切符を東京駅で購入するのに同行し、丸ビル内で食事をともにしたばかりでなく、また郵送で上船前に、大阪より、ある女性から彼に宛てた私信数通をあづかってくれと委託を受けた人物である。

文献目録に載るツヴァイクの「デーモンとの闘争」は別府に向かう大阪商船すみれ丸に残されていた遺品のひとつである。この一書に取り上げられたヘルダーリンも、クライストも、ニイチェもデーモンにとりつかれ、若くして、一気に人間の領域を超える天才の高みにかけ登り、やがて瞬く間に奈落へ転落してしまった人達である。春月は、これからの詩人達の純乎の魂が不安の霊にゆさぶられながらも、生命の焰をひたむきに燃烧させて行くその過程に最大の興味があった。ゲーテやトルストイの健全な素朴さをしりぞける。人間心理の深層にうごめく衝動の複雑な様相を直視することを、ヘルダーリン、クライスト、ニイチェ達から学び、天才の性格の尖鋭化とそれに伴う歪みが極点に達するとき、自らの生を断つか、破滅的に精神の暗黒と愚鈍を持つしか方法がないことを認識した。

日本の詩人生田春月も、人間的に懐疑し、時代に苦悶し、自我の主張を拒まれることで、反抗の炎を高めるとき、ドイツの天才達と同じように危険と悲劇の淵を歩まざるをえない。同時代の武者小路実篤や吉田絃二郎のように安易な妥協を自ら許さなければ、未完成のまま人生を終えることを選ばざるをえなくなる。しかしながら、懐疑思想と主我的個人主義のたどりつく絶望をのがれるため、自由な死を選ぶのでなく、癩を病む旧約聖書中のヨブと同じように、病苦と苦悩、侮蔑と迫害に耐えながら、またニイチェと同じ意志で、運命愛をもって生きぬく生田長江のような生き方もある。彼等の生と死は、今後とも問われ続ける問題である。

1986. 4. 20

## 註

- (116) 生田長江「ツァテトウストラ」(明44. 1. 新潮社) P. 2.
- (117) 生田長江「ニイチェ全集」第5編(大1. 11, 新潮社) P. 4 および生田長江「ニイチェ全集」7(昭10. 4, 日本評論社) P. 4.
- (118) 生田長江「ニイチェ全集」第5編 P. 2.
- (119) *ibid.*
- (120) 「二時過ぎ、代々木の末日聖徒のアルマ・オオ・テイラア氏の所へ使に行く……暫くまごついたが、やっとわかった。成程立派な住居だ。テイラア氏自身出づ。例のものを渡す。暫く待って、クリスマスの入場券貰ってかへる」(明治41年12月20日)「末日教会は、昨日のクリスマスのなごりだろう、玄関や横の硝子戸口に、杉の葉を長く蛇のやうにして、アーチのやうに柱へ鴨居へくゞりつけてあった、それに紙の風車がとところところにつけてある。庭には其むしられたのが落ち散ってゐた。玄関には棚がある。呼鈴を押すと、小さい男の子と、十六位な、表情の豊かな、眼の美しい少女が出てきた……花籠と手紙を渡す……」(同年同月26日)「午後、千駄ヶ谷(代々木の3文字抹消)テイラア氏へ行く。雪消の路、悪く閉口」(明治42年1月11日)「テイラア氏来」「先生は千駄ヶ谷行」(同年同月29日)「テイラア氏、感心に二時間余りで帰った。先生はがっかり疲れて、何も手につかぬ有様だ。何しろ、昨夜から、テイラア氏の来る迄、続けているから随分ひどい」(同年2月20日)「テイラア氏、テイラアに似合はず、九時と云って置いて、九時半頃に来て、三四時間先生をいぢめて帰って行った」(同年同月26日)「先生、テイラア行」(明治4年同月10日)「テイラア先生来。先生は四時間油をとられなすった」「テイラアは、あれで仲々頭がいいのださうだ。僅か四年位で、あれ位よく日本語を覚えたものもあるまい」(同年同月11日)。引用文は生田春月「日記」(筆稿、鳥取県立米子図書館所蔵)による。
- (121) 生田春月編「日本近代名詩集」(大8. 3, 越山堂) P. 11.
- (122) 生田花世・生田博孝編「生田春月全集」第4巻(昭5. 12, 新潮社) P. 341.
- (123) 生田花世・生田博孝編「生田春月全集」第10巻(昭6. 8, 新潮社) 附録 P. 8.
- (124) 百田宗治「路次ぐらし」(昭9, 厚生閣) P. 168.
- (125) 中村武羅夫「明治大正の文学者」(昭24. 6, 留女書店) P. 279.
- (126) *ibid.* P. 291.
- (127) *ibid.* P. 293.
- (128) 参照 原田禹雄「天刑病考」(昭58. 3, 言叢社) P. 160.
- (129) 平塚らいてう自伝「元始、女性は太陽であった」下(1971. 9, 大月書店) P. 454.
- (130) *ibid.* P. 455.
- (131) *ibid.*
- (132) 檜崎勤「作家の舞台裏」(昭45. 1, 読売新聞社) P. 148-149.
- (133) *ibid.* P. 150.

- (134) 中村武羅夫「明治大正の文学者」P. 293.
- (135) 生田花世. 生田博孝編「生田春月全集」第8巻(既出) P. 24-25.
- (136) ibid.
- (137) 生田春月「山家文学論集」(昭2. 8, 新潮社) P. 274.
- (138) ibid. P. 274-275.
- (139) 生田春月「萩原朔太郎氏の『新しき欲情』の感想」(大12. 1, 「詩と音楽」附録, アルス出版月報) P. 6.
- (140) ibid.
- (141) 加藤愛夫「生田花世思い出雑記(1)」(昭47. 9, 「共悦」所載) P. 11.
- (142) 参照 日独協会編「日独文化交流の史実」(昭49. 3, 日独協会) P. 167-168.